埼玉県立近代美術館ニュース[ソカロ]2023年12月▸2024年1月号 the museum of modern art, saitama NEWS #123

# ZOCALO 2023 12 ▸ 2024 1

ZOCALO＝ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

## 魅惑のリアリズム

MOMASコレクション
2023年12月2日(土)〜2024年2月25日(日)

① 上田薫《ジェリーにスプーン C》1990年

モチーフを忠実に描写した緻密な絵画作品やリアルに形づくられた立体作品を見て、驚いたり心惹かれたりした経験はありませんか。当館の収蔵品である上田薫の《ジェリーにスプーン C》(①)は、ジェリーをスプーンで掬おうとする瞬間を克明に描きとった、まさに「本物そっくり」な絵画で、当館で最も人気のある作品のひとつです。この作品の鑑賞者は、作家の驚くべき描写力に感嘆することでしょう。しかしながら、こうした「リアル」な作品の面白さは、技術的な側面だけではないはずです。それぞれの作品が制作された背景にある社会状況や当時の美術動向、作家の意図等を掘り下げてみると、リアリズムの描写の魅力がより深く理解できるかもしれません。MOMASコレクション「魅惑のリアリズム」(12月2日〜2024年2月25日)は、このような趣旨のもと、近現代の日本の作家による「リアル」な表現に注目し、その魅力を紹介するものです。ここでは、出品作品のなかから2点を取り上げたいと思います。

まずはこちらの作品(②)をご覧ください。モノクロ写真のように見えますが、実はコンテで描かれたドローイングです。作者は、当館ではおなじみの画家・倉田白羊の兄である倉田弟次郎です。彼を指導したのは、写真技術が普及し、現実に忠実かつ正確に描写された西洋絵画が日本人画家に大きな影響を与えた明治初頭に、写真のイメージを絵画に取り入れて構成する手法で制作した洋画家・浅井忠でした。《農家作業》は、浅井の影響を受けつつ修業の一環として写真を模写したものだと思われますが、その精巧で緻密な描写からは、写真という科学技術に挑もうとする画家の姿勢がうかがえます。残念ながら弟次郎は病により23歳で夭折してしまいましたが、とてつもない観察眼と画力を持った弟次郎の作品は、制作から100年以上が経過した現在も、見る者に新鮮な驚きを与えることでしょう。

② 倉田弟次郎《農家作業》1891年

次にご紹介するのは、写真を用いて対象を克明に描き出すスーパー・リアリズムの手法で知られる画家・鴫剛の作品です(③)。鴫が大学に在籍していた1960年代後半、日本の美術界では既成の芸術概念に対する問い直しが叫ばれており、もの派をはじめとする非造形的な作品が台頭していました。そのような状況下で伝統的な絵画制作を行うことは、いわば作家という立場を放棄することと同義でした。そうしたなか鴫は、大学の教師に告げられた「写真のように描いたものは絵ではない」という言葉を「写真のように描けば絵ではないものが描ける」と解釈し、「写真を描く行為」を始めます。作品の多くは、作家自身が撮影した何の変哲もない街角の風景や都市近郊の団地などの写真をもとに制作されますが、鴫の手つきは対象を描き出すというより、写真の細かな粒子をカンヴァス上に置き換える作業と言えるものでした。そうして出来上がる作品には、絵画と写真の差異や現代におけるオリジナルとコピーの関係性といった問いが内包されています。元々大学院で保存修復技術として模写を専攻していた鴫の精緻な再現描写には目を見張るものがある一方で、無個性な写真をもとに機械的に描かれた作品からは、どことなく寒々とした空気も感じられます。そこには、漂白され均一化してゆく現代社会に対する作家の視線も示されているのかもしれません。

③ 鴫剛《Collection-Recollection 3》1985年

さて、もう一度上田薫の《ジェリーにスプーン C》に立ち返ってみましょう。いかにもこの作品は「リアル」で「本物そっくり」に見えます。しかし、光を反射したスプーンに映り込む部屋の情景や、過剰ともいえるほどツヤツヤとしたジェリーの質感の表現など、日常の視覚では発見できないような新鮮な感覚に満ちていることに気づかされます。こうしたリアリズム作品を通して、私たち人間の視覚世界は揺さぶられ、ものを「見る」ということについて自ずと考えさせられることでしょう。展示では、早瀬龍江・白木正一夫妻に学んだ飯能市出身の画家・小島喜八郎による風景を精巧に描いた絵画や、重村三雄が手がけたリアルな立体作品も出品予定です。めくるめくリアリズムの世界をどうぞお楽しみください。(S.A.)

※執筆にあたっては以下の文献を参照しました。
『鴫剛―もう一つの眼差し―』国立国際美術館、2003年

## サマー・アドベンチャー「ガムテープのズック屋さん！」

埼玉県立近代美術館では、美術館での“できごと”を楽しむというコンセプトで、ワークショップ「MOMASのとびら」を開催しています。夏休みはその拡大版として「サマー・アドベンチャー」を4回実施しました。

第1回目の8月5日(土)はクツ創り家の佐藤いちろうさんを講師にお招きし、小学生以上を対象にプログラムを行いました。まず初めに佐藤さんから「靴って、いつから履くようになったんだろう？」という問いかけがあります。みんな自分が履いている靴を見ます。毎日使う物ですが、ひも靴、マジックテープのついた靴、サンダル、いろいろな形の靴があり、色も様々だということに気が付きます。次に佐藤さんの作品を見せてもらいました。段ボールでできた大きな靴は、なんとゴミ箱になっていて、左右で可燃物・不燃物に分かれています。さらに佐藤さんが何気なく持っていたバインダーもあっという間にサンダルに変化していきます。靴に対しての考えや発想が広がっていきます。

今回のサマー・アドベンチャーは「ガムテープのズック屋さん！」です。段ボールとカラー布ガムテープ、新聞紙など身近な材料を使って、世界に一つしかないオリジナル靴を作っていきます。まず初めに靴のベロ(タン)の部分から作っていきます。好きな色の布ガムテープを選び、貼っていきます。赤、青、緑、白、銀、桃・・・左右違う色にしたり、模様をつけたりとみんなそれぞれ違った靴ができていきます。次に初めて目にした本物の靴を作る時に使う道具を使って、紐を通す穴をあけていきます。靴に紐を通すのが初めてという参加者も、順番に丁寧に紐を通していきます。今回は「ズック屋さん」ですから、自分の作った靴は売り物としてお店に並べます。みんなそれぞれ自分の作った靴の値段を設定します。「キラキラの宝石がたくさんついているから1億円」「売れてほしくないから非売品！」値札に記入し、お店のように並べて完成です。どれも同じものはなく、一つ一つ手作りの、まさに「世界に一つしかない靴」が並びました。佐藤さんから1日店長にしてもらったり、実際に履いて歩いてみたり、とても充実した時間となりました。

今後も、アーティストや作品をとおして新しい発見や素敵な思い出ができる普及活動を目指してまいります。(H.Y.)